

文学の道コースには、こんなにすてきな見所があります。あなたはどこに行ってみます？

鵜飼を待ちながら鵜飼を知る

① 鵜飼観覧船待合所（仮設）

鵜飼観覧船乗船までの待ち時間を過ごせるよう、鵜飼観覧船事務所の正面（道向い）にある。平成21年の春頃には、新しい待合所が完成する予定。

長良川を湛える芭蕉の当地句

② 芭蕉句碑（ホテル内）

「このあたりゆきみゆるものは皆涼し」
長良川河畔のホテル内にある。句は中川原新田の油商だった賀島善右衛門邸の水楼から、長良川の景色を見渡し、その美しさに感動して詠んだものとされる。芭蕉は「十八楼ノ記」に、中国の代表的景観である「瀟湘（しょうしょう）八景と西湖十景を合わせたほどの風情がこの水楼を渡る涼風にあり」と、ここを「十八楼」と名づけたことを記している。水楼に名づけたという説もある。

江戸へ時間旅行

③ 古い町並み

岐阜市において、江戸時代からの古い町並みが最もまとまって残っているのが川原町である。これは、明治24年（1891）の濃尾震災や、戦争の罹災を奇跡的に免れたため、江戸～明治期の格子組の商家・町家が見られ、「岐阜市都市景観重要建築物」に指定された建物もある。「川原町」は実は町名ではなく、かつて長良川に川湊があった、現在の湊町、玉井町、元浜町の総称である。最初に川湊をつくったのは斎藤道三とされ、それ以降水運が盛んとなり、長良川上流からは木材・竹材・美濃和紙などが集まり、材木問屋や紙問屋が並ぶこととなった。

この辺りからの眺めが「十八楼」

④ 賀嶋陽歩邸跡（十八楼命名の地）

元禄元年（1688）5月、それまで京都に滞在していた芭蕉は、東京に戻る折、妙照寺の住職「己百上人」に案内され岐阜に寄った。この時の滞在期間は約1ヶ月で、芭蕉の各地での滞在期間としてはかなり長い。この時、賀嶋陽歩（岐阜市日野中川原の商人）や安川落梧（岐阜市本町の商人）と吟詠唱和した。芭蕉は、長良川河畔で現在の川原町にあった賀嶋陽歩の別荘を訪れた際、その水楼からの長良川の景勝を賞し、中国の代表的景観である「瀟湘（しょうしょう）八景と西湖十景を合わせたほどの風情がこの水楼を渡る涼風にあり」として、ここを「十八楼」と名づけたとされる（賀嶋氏の亭に「十八楼」と命名したという説もある）。現在、その水楼などは全く残っていない。

「白い魔魚」ゆかりの旧旅館

⑤ 旧いとう旅館

長良川の岸辺の元浜町にある旧旅館。川原町のメインストリートからは外れた所に位置しているが、風情ある建物は一見の価値あり。舟橋聖一が書いた小説「白い魔魚」の舞台となったことで有名である。この小説が映画化された際は、岐阜でも撮影が行なわれた。主人公の紙問屋の娘「竜子」役は、有馬稲子さんだった。

道三の菩提寺

⑥ 常在寺

開山は宝徳2年（1450）、土岐家守護代斎藤妙椿が、妙覚寺から尊聖院日範を招いて建立したとされ（日蓮宗京都妙覚寺の末寺になる）、文殊菩薩が安置されている。正式名称は、鷲林山常在寺という。斎藤道三から三代にわたる菩提寺だったため、この道三と息子の義龍の画像（国重要文化財）を所蔵している。道三は後に土岐氏をも滅ぼして美濃国主になり、常在寺に寺領を与えて保護した。道三は、京都の妙覚寺の宗徒であったが、環俗して油売りの松波庄九郎として美濃にきて、常在寺を拠点に美濃国主になったと伝えられている。しかし最近の調査により、「国盗り」は、道三一代だけで成されたわけでは無いらしいことが解明されつつある。

己百への挨拶句

⑦ 芭蕉句碑（妙照寺）

「やどりせむあかざの杖となる日まで」
岐阜市糶川町にある妙照寺にある句碑。句は元禄元年（1688）、芭蕉が6月に岐阜に来てこの寺の奥書院に滞る際に、挨拶句として後にこの寺の住職となる己百（さく）に贈ったもの。句は、居心地が良いこの寺に、庭に生えているアカザが成長して、杖にできるくらいになるまで長くここにいられたら」という気持ちを詠んだものといわれる。

歴史の玉手箱

⑧ 岐阜市歴史博物館

昭和60年（1985）11月開館。平成17年（2005）3月、歴史を体験・体感するというコンセプトでリニューアルした。その目玉の一つは、原始から近代に至るまで歴史の面白さを体験できる場を備えたこと。特に、「戦国ワンダーランド」では、織田信長が活躍した戦国時代の岐阜の町並みを再現した「楽市立体絵巻」で、貝ごまや双六といった昔の遊びが体験でき、当時の各種着物を試着でき、時代に没れる。「天下鳥瞰絵巻」では、信長の天下布武の気持ちを感じることができる。また、市民の通年型ボランティア活動を導入し、その協働により体験・体感コーナーが活かされている。

虫好きも建物好きも

⑨ 名和昆虫博物館

岐阜公園内にある国内有数の昆虫博物館。春の女神とも言われる「ギフチョウ」や「オオムラサキ」をはじめとし、さまざまな昆虫の種類は総数約18,000種、標本数は30万点以上を数える。春には羽化したばかりの本物の「ギフチョウ」を見ることもできる。明治40年（1907）建築の記念昆虫館、その隣の大正8年（1919）建築の昆虫博物館とともに、時代を感じさせる美しい洋館で、設計は近代関西における西洋建築の父といわれた武田五一による。登録有形文化財岐阜県第1号、都市景観重要建築物岐阜市3号に指定され、展示されている昆虫とともに岐阜市民の財産となっている。

信長、一豊、退助が待つ。

岐阜市に来たらここへ。

⑩ 岐阜公園

明治21年（1888）開園。金華山、長良川に抱かれ、市民や観光客の憩いの場として親しまれている。かつては、図書館、科学館、動物園、水族館などがあった。金華山頂・岐阜城に行くには何本かの登山道とロープウェイもある。信長の居館跡、冠木門、山内一豊と千代婚礼の地モニュメント、加藤東一栄三美術館、若き日の信長像、板垣退助像、明治天皇聖像、菊花展、三重の塔など見所が多く、加えて平成13年（2001）には、「信長の庭」が完成した。

天然林の山肌と長良川のスペクタクル、
金華山頂へ

⑪ 金華山ロープウェイ

昭和30年（1955）に開業。山麓駅から山頂駅まで、高低差255m、距離599m（最急勾配32°42'）を約3分（速度は約13km）で登っていきます。ゴンドラからの長良川の眺めもすばらしい。ゴンドラは46人乗り。平日は、15分に1本、日祝日は10分に1本の運行。

古井はどこに？

⑫ 芭蕉句碑（三重塔下）

「城跡や古井の清水先とはむ」
岐阜公園の三重塔の下、登山道の入り口となる所にこの句碑が建てられている。山城で水を得にくい伊奈波山城のことを詠んだという説もあるが、元禄元年6月に、芭蕉が岐阜に来た際、稲葉山（金華山）の別邸に納涼のため芭蕉を誘った庄屋の松橋喜三郎氏の邸宅の古井戸のことだとみられている。

芭蕉の気分で鵜飼を見よう

⑬ 芭蕉の鵜飼見物場所

芭蕉の「十八楼ノ記」に、芭蕉は長良川の鵜飼を「伊奈波山の陰」で見たと記されている。これは現在の長良橋南詰め（左岸）のやや上流辺りだとみられている。

鵜飼を詠んだ最も有名な当地句

⑭ 芭蕉句碑（ポケットパーク名水）

「おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな」
長良橋南詰のポケットパーク「名水」にある。芭蕉が詠んだこの句は、鵜飼を詠んだ俳句の中で最も有名なものの一つ。華やかな鵜飼が終わった後の静寂の中に、芭蕉は鵜の哀れ、生きるために魚を獲らなければならぬ人間の宿命を感じたのが、この句を詠んで以降、彼は魚類を一切食べなくなったといわれる。

山口誓子の句碑

⑮ 山口誓子の句碑

「夕焼のすでに紫鵜飼待つ」鵜飼観覧船事務所、「鵜の川の迅さよ時の流れより」岐阜公園、「鵜篝の早瀬を過ぐる大炎上」山下哲司鵜匠庭内、「城涼し天の真中に孤絶して」長良など、山口誓子の句碑は岐阜市内の各所で見られる。明治34年（1901）京都市生まれ。21歳で高浜虚子に師事。東大卒業後、大阪住友合資会社本社に入社、胸部疾患で退社。昭和23年（1948）「天狼」創刊。平成6年（1994）、92歳で没する。

歴史に守られてきたアーティストの競演

⑯ 鵜飼

長良川の鵜飼は古典漁法を今に伝える岐阜市の夏の風物詩。その歴史は古く、約1,300年前にまでさかのぼることができる。織田信長公は鵜飼を保護し、「鵜匠」という名称も信長が付けたという説もある。江戸時代は、徳川家も鵜飼を見物し、尾張徳川氏は鮎を将軍家に献上するため、長良川の鵜飼を保護し漁業者者に「鵜匠」の名を許していた。俳聖・松尾芭蕉も「おもしろうてやがて悲しき 鵜舟かな」という有名な一句を残した。また、昭和11年と昭和36年の2度にわたり、チャップリンも見物のために来岐。鵜匠をアーティストと賞賛し「ワンダフル」を連発したといわれている。鵜飼は鵜匠が10～12羽の鵜を見事な手縄さきで操り、鵜が次々に鮎を捕る日本の伝統漁法の1つ。毎日を鵜とともに暮らす鵜匠は代々世襲制で、常日頃から鵜と一緒に生活しているため、鵜匠と鵜は呼吸の合った動きを見せ、見事に鮎を捕らえてくる。暗闇に満ちた水面にかかり火を焚いた鵜舟がゆっくりと現れ、鵜が鮎を捕らえる様子を眺める事ができる。目の前で、勇壮な歴史絵巻が繰り広げられ、幽玄の世界へと誘う。鵜飼観覧船はもちろん、右岸に整備されたプロムナードからも楽しむことができる。

鵜飼のことならここへ

⑰ 鵜飼観覧船事務所

鵜飼を船に乗って楽しむ際、この事務所でも乗合船や貸切船の予約ができる。現代の建築ながら、景観にとけこむ建物で、傍らの川灯台ともマッチしている。山口誓子の句碑もある。

ここから別世界へ

⑱ 鵜飼観覧船のりば

鵜飼観覧船のりばは、長良橋南詰を下流側に降りた所にある。鵜飼観覧船事務所もあり、そのすぐ下かのりばとなっている。鵜飼が始まる直前には鵜匠による鵜飼の解説が行なわれ、観覧客の好評を得ている。

松尾芭蕉の案内人

● 安川落梧邸跡

元禄期（1688～1704）、岐阜は安川落梧を中心に俳壇が盛り上がりつつあった。安川落梧（通称助右衛門、屋号は萬屋）は、岐阜本町の呉服小間物雑貨商の富商だった人物で、京都と取引をしていた。商売の一方で毎月月会を開き、蕉風を広めようとした。元禄元年（1688）夏に、芭蕉を稲葉山の亭に招き、鵜飼も見たとされる。「瓜島集」を撰集中の元禄4年（1691）没。